

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：32666

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K08570

研究課題名（和文）市民と共に学ぶ医療を実現する次世代模擬患者養成プログラム開発に関する研究

研究課題名（英文）Development of next-generation SP training program to realize medical care that medical students and citizens can learn together

研究代表者

藤倉 輝道（Fujikura, Terumichi）

日本医科大学・医学部・教授

研究者番号：00238552

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は医学教育における市民参画推進方略の開発である。市民参画の主要形態である模擬患者（SP）に新たなプログラムを提供し、患者という視点を超えて、一市民として医学教育に参画して頂く方略を開発した。SPらに対するインタビュー調査、全国の医学部対象のアンケート調査の結果を踏まえた受講プログラムの提供、教育実践の場の提供、テキストの作成、SP自身による研究活動を行い、これらの研究成果報告書を作成し全国のSP養成者に送付し共有化を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療人と対をなす形で一市民が患者として教育に携わることが必要だが、現実的な方略としては市民は模擬患者（SP）を経てより包括的に医学教育に参画するシステムを構築することが肝要である。本研究では全国医学部の現状と意向調査、我々の大学に所属する約60名の模擬患者の意向調査などを踏まえ、これを可能とするシステムを構築した。欧米でもまだ一定の道筋が定まらない医学教育上のPatient and Public Involvementの具体的な方略を、次世代SP養成プログラムという形で開発し情報公開出来たことでわが国の今後の医学教育の推進に寄与できたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop a strategy to promote citizen participation in medical education. SP activities are a major form of citizen participation in medical education. We have provided a new training program for SPs and developed a strategy to involve them as citizens in medical education beyond the perspective of the patient. The following strategies were developed based on the results of interview surveys with SPs and questionnaire surveys of medical schools nationwide. These strategies are to provide lecture programs to SPs, prepare textbooks, provide opportunities for educational practice, and practice research activities by SPs themselves. We created the above research result report and sent it to SP trainers nationwide for sharing with them.

研究分野：医学教育学

キーワード：医学教育 患者 模擬患者 一般市民 PPI

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 共用試験 OSCE の正式実施から 10 年以上が経過し、多くの大学で模擬患者 (SP) 養成も行われるようになった。模擬患者の中にもステップアップを望む者が生じつつあった。
 - (2) 大学側も教育評価などの場面でステイクホルダーとしての一般市民の意見をニーズ分析に役立てたいと考える場面も生じていた。
 - (3) また医学部学生は、一般市民、年長者、人生の先輩としての SP との対話から教育者側が想定していなかった多様な学びを得ていることも推察された。
- SP、大学側、学修者それぞれが、従来の SP が医学教育上の新たな役割を果たすことに前向きに取り組むことに関心を抱き始めていたと考えられる。SP らの思惑と大学側の意向や医学教育上のニーズとの整合性を図る必要が生じつつあったと考える。

2. 研究の目的

本研究では模擬患者 (SP) が新たな側面、特に一般市民の立場から医学教育に参画するシステムの構築を目的とする。新たな役割を担う仮称「次世代 SP」に求められるものは何か、わが国における現状分析を経て「次世代 SP 養成プログラム」の開発を行い、情報を全国の SP 養成に関わる組織と共有する。

3. 研究の方法

- (1) 経験年数の長い SP らを対象にインタビュー調査を行い、SP 活動の現状における問題点、次世代に繋げるために学ぶべきと考える知識やスキルについて探索する。
- (2) 全国の医学部を対象に「医学教育における一般市民の参画状況」に関するアンケート調査を行う。
- (3) 全国医学部対象のアンケート項目のうち、「一般市民が医学教育に参画することの意義」に関しては、本学在籍 SP 約 50 名も対象に調査を行う。
- (4) 上記の調査結果をもとに、本学 SP を対象に「次世代 SP 養成講座」を開講し、事後アンケートをもとにその有用性を検討する。
- (5) 次世代 SP に相当する新たな役割の実践を試み、事後評価を行う。
- (6) 以上の研究成果を SP との共同作業で取り纏め、報告書を作成し全国の SP 養成機関に送付する。

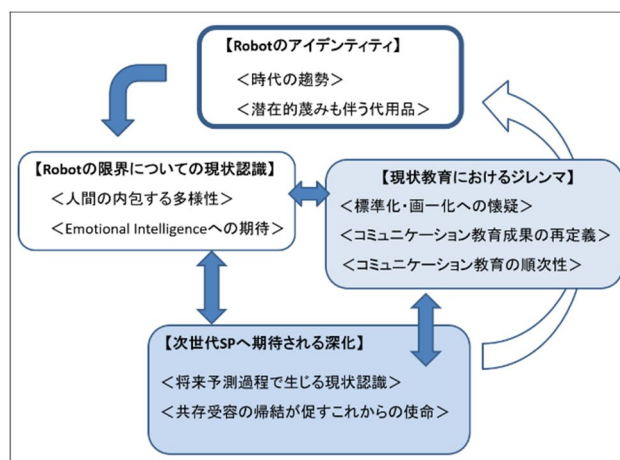
4. 研究成果

- (1) 次世代 SP 養成プログラム作成にあたっての意識調査結果
研究開始にあたり、本学 SP の中で経験年数の長いコアメンバーを 5 名選出した (男性 3 名、女性 2 名、平均年齢は 64.8 ± 7.5 歳、平均 SP 歴は 9.8 ± 2.4 年)。
インタビュー調査の結果以下の項目が抽出された。現状の参画が学生にとっては OSCE 対策に終始しており、大学側も同様に捉えているのではないかと懸念を SP は抱いている。フィードバック技能など従来の SP として求められるスキルにもまだ満足できていない。医学教育、医療に関する知識の修得については必要性は理解できるものの現状 (研究開始の時点) ではあまりイメージできない。
これに対し大学で卒前教育、SP 養成に携わる教員 5 名 (医学部長、医学教育センター長、SP トレーナー) にインタビューを行った結果、次世代 SP と位置付けられる方々には医学教育の現状と基本的な教育理論についての理解は最低限必要であろうとの見解がなされた。と同時に、次世代 SP となれば、より大学寄りの立場におかれ従来の SP との両立は難しいのではないかと懸念が示された。

(2) 次世代 SP に求められるものについて ; 質的研究手法を用いた探索結果

- 先の意識調査で SP らは大学が彼らを OSCE 対策要員と位置付けているとの懸念を抱いていることが明らかになった。彼らの発言の中で、「OSCE の練習相手だけならロボットでもできる」というものがあり、これに着目し、その意識の深層を探索するために「近未来に AI を搭載した SP ロボットが出現したらどう考えるか」というテーマでフォーカスグループインタビュー (FGI) を同じコアメンバー 5 名を対象に行った。結果は Steps for Coding and Theorization 法 (SCAT) を用いて解析した。得られたストーリーラインと概念図は以下の様になった。

『SP らは現状の一般市民の視点から【Robot のアイデンティティ】を見定め、Robot SP を容認しつつも < 潜在的蔑み



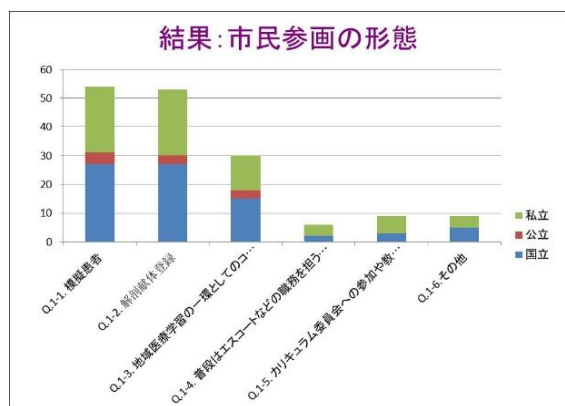
も伴う代用品>と見なしている。【Robotの限界についての現状認識】としてRobot SPが人間の内包する多様性にどこまで対応できるのか懸念し、Robotが具有し得る<Emotional Intelligence (EI)への期待>を抱きつつも、むしろ限界を意識している。Robotの特性から生まれる<標準化・画一化への懐疑>も抱き、画一化された医師の量産を危惧し、コミュニケーション教育の順次性を考慮しなければ学習者、教育者、患者、医師の多様性に対応できなくなるのではないかと考え、【現状教育におけるジレンマ】を抱く。一連の将来予測過程から、現状でもSPとして十分果たせていない共感力の育成などの使命も再認識され、AIやRobotとの<共存受容の帰結が促すこれからの使命>を今、再考することが【次世代SPへ期待される深化】であると考えている。』

あえてテーマをヒトとSPロボットの比較という形で焦点を絞り行われた研究で、対象者も5名と少ないものであるため限界はあるものの、現状でSPが何を重要視し活動しているのか、今後時代の要請にも応えつつどのように活動したいのかが明らかになった。

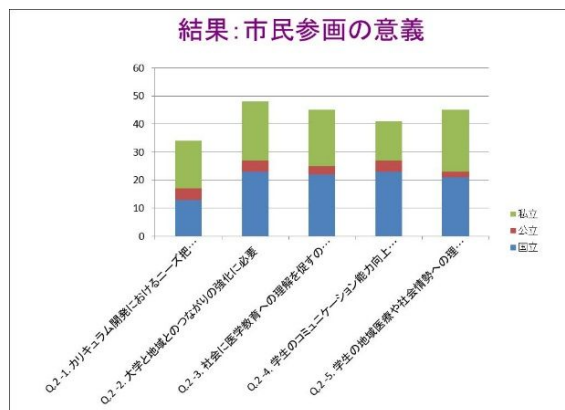
(3) 「一般市民の医学教育への参画状況」に関する全国調査結果

全国の医学部を対象にアンケート調査を行い60大学(74%)から回答を得た。

一般市民ボランティアの医学教育参画状況
一般市民の教育参画の形態として、SPとしての参画が回答60大学中54大学、解剖実習献体登録が53大学でこの2つがわが国における代表的な市民参画の形態であることがわかった。またSPについては45大学が自大学で独自に養成をしていた。医療現場ではない地域のコミュニティでの学習における参画は30大学で報告され、病院で患者エスコートなどのボランティアをされている方の教育面での参画は6大学、カリキュラム委員会など教育評価での参画は9大学から報告された。



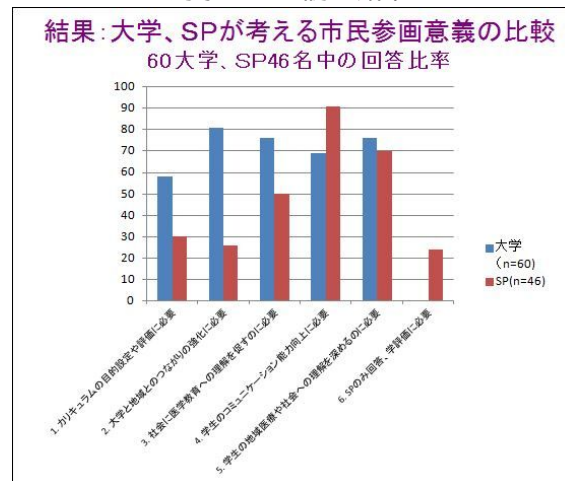
一般市民が医学教育に参画することの意義
カリキュラム開発におけるニーズ把握やプログラム評価に必要と考える大学は34大学57%であった。国公立大学では50%であるのに対し、私立大学では65%が必要と回答した。大学と地域とのつながりの強化に必要と考える大学は48大学、80%であった。社会に医学教育への理解を促すのに必要と考える大学は45大学、学生のコミュニケーション能力向上に必要と考える大学は41大学、逆に学生の地域医療や社会情勢への理解を深めるのに必要と考える大学は45大学であった。



(4) 一般市民が医学教育に参画することの意義についてSPを対象とした調査結果

上記のと同様のアンケート調査を本学SPを対象に行った。回答者は46名、男性14名、女性32名であり、平均年齢は男性70.1±6.5歳(平均±SD)、女性57.4±8.7歳であった。

カリキュラム開発におけるニーズ把握、プログラム評価に市民の参加が必要と考えるSPは14名、30%であった。大学と地域とのつながりの強化に必要と考えるSPは12名、社会に医学教育への理解を促すのに必要と考えるSPは23名であった。学生のコミュニケーション能力向上に必要と考えるSPは42名(男性14名、女性28名)、91.3%であった。学生の地域医療や社会環境への理解を深め



るのに必要と考える SP は 32 名であった。また大学向けの調査では問わなかったが、SP に対しては学生一人一人の能力評価に市民が参加する必要性を感じるか否かという問いかけを行い、必要と考える SP は 11 名、23.9%であった。

ステイクホルダーとしての一般市民がカリキュラムのニーズ分析や評価に参画することの意義について、これを必要と考える大学はこの時点で 57%に留まり、市民の側に属する大学所属 SP においてはこれを必要と考える者は 30%に留まっていた。大学は主に、地域社会との繋がりの強化にこれを必要と考えていた。一方で一般市民とはいえ SP を対象とした調査であったことから、彼らは現在の活動の視点から、主に学生のコミュニケーション能力の向上に参画が必要と考えていた。さらに対象を広げ SP 以外の一般市民の見解を調査する必要性も検討したが、ある程度医学教育について見識や関心の無い対象者にこのような調査を行うことには疑問が呈された。このような調査を含め、一般市民、あるいは Lay Person といったものに何らかの線引き、定義付けが必要と考えられ、次の研究課題へとつながった。

(5)次世代 SP 養成プログラムの実施

以上のような様々な調査から得られたニーズ分析の結果を踏まえ実際に養成プログラムを開催した。内容は以下で、SP の生まれた経緯と今までのふりかえり、フィードバック技能トレーニング、コーチングスキル、日本語と日本文化の理解について(文化人類学的視点)

地域と医療者とのヘルスコミュニケーション、行動科学の視点から、SP 活動の再考、認知症患者の演技方の 7 項目である。テーマに応じて外部講師も招きとのみ研究者らが講師を務めた。

内容編成については SP 側のニーズを反映させたのがと、全国医学部調査の結果を反映させたものが、研究者ら大学側が考えた医学教育の現状理解と今後のニーズを反映したものが、となる。これらの事後の SP による評価アンケートではいずれも高い満足度は得られていた。においては、25 名の 5 段階評価による回答で、自分の知りたいことと合致していたかについては平均 4.36、今後の自分の SP 活動に影響を与えるかについては 4.88 という結果であった。

また、大学側のニーズの一つとして、プロフェッショナリズム教育についても理解を求め、養成プログラムに加えるか否か検討を行ったがこれについては意図が不明確であると判断され、研究代表者が行っている法曹教育との対比研究について紹介し、むしろ本研究の取り組みをそちらに反映させるに留めた。

事後の参加者のフリーコメントも踏まえ得られた結論としては、次世代 SP 養成には、彼ら自身の強い関心がある「共感力」の育成に関わる内容が不可欠であり、これに加え大学や教育者側が求める、医学教育の現状理解、医学の周辺領域となる心理学、社会学や文化人類学の素養、そして SP と教育者両者が必要と考える、今後の医療を反映した認知症患者などを演じるスキルが構成要素として確認された。

(6)次世代 SP 養成プログラムを経ての新たな活動実践

養成プログラムの受講とこれまでの研究成果の共有化も経て、SP の中の数名に次世代 SP に繋がる教育実践を試みて頂いた。従来、SP は模擬患者としての本来の業務では「教育者の視点」に立つことは求められていない。また学生を評価することについても現在その是非は議論の俎上にある。それも踏まえたうえでの実践であった。

第 3 学年の正規授業において「患者の視点から見た医療」という従来は研究代表者が行っていた講義を本研究に協力されて来たコアメンバーの SP の中の 1 名にお願いした。事後の学生による授業評価アンケートでは授業の満足度は 8.3 (10 段階評価)であった。患者やその家族としての体験、SP としての経験を踏まえ、これを客観視した論調で講義が行われた。

第一学年を対象とした「医療コミュニケーションの基本演習」の授業と演習の企画、実施を SP の中の 1 名にお願いし実施した。この中では、学生グループ内のピア評価に用いるツールの開発も行われた。演習に参加した他の SP の方々 20 名によるピア評価の結果、授業の満足は 8.3 (10 段階評価)であった。

SP らによる独自の意識調査と学会発表が 2019 年の日本医学教育学会学術大会で行われた。演題名は「医療面接実習や OSCE に参加した模擬患者が感じる現実との違和感」で、教員は演題登録などの事務手続きやスライド、発表原稿の作成は手伝ったものの、調査研究そのものは彼らが自主的に行ったものである。当初の研究計画には無かったものであるが、協力者として本研究に関わる中で生じた彼らの意識の変化の現れである。このような研究活動に相当するものはまさに次世代 SP にふさわしいものとする。

SP 活動の社会性を多面的に理解することを目的として、法曹教育に参加されている模擬依頼者 (SC) ならびにその養成者と合同会合を開催し、双方の活動の差異と共通点を論じ合い今後の協働の可能性を検討した。

以上の活動実践はいずれも成功裡に終わったと考える。教育実践については翌年度以降も継続となっている。研究活動については、大学側が提案することはせず SP らの主体性に委ねることとした。また法曹教育との協働については今後の研究課題とした。

(7) 研究成果報告書作成並びに配布

以上の全ての研究成果に加え、本学で開発した SP 養成テキストを合わせた研究成果報告書を最終年に SP にも執筆をお願いし作成した。これを予定通り全国の医・歯・薬学部並びに大学外の SP 養成に関わる担当者 200 施設以上に配布した。一部の大学施設、団体から返書を頂き、活用いただく旨報告もなされた。

まとめ

模擬患者 (SP) に対して従来の役割を超え、特に広く一般市民、日本国民の視点から我が国の医学教育に参加できる人材となるような育成プログラムを作成し実践を試みた。

まず、このようなニーズがあるか否か、全国の医学部を対象に調査を行った結果、まず大学側は施設と地域の連携強化の目的で必要と考えていることがわかった。一方で一般市民の立場にある SP に対する調査では、その従来の役割の延長として学生のコミュニケーション能力の育成への参画に不可欠と考えていることがわかった。大学、SP の間ではまだ立場の違いがあり、一般市民の教育参画という観点でコンセンサスを得るには課題が残されている。と同時に、この文脈で考える一般市民というものの定義付けが必要であることもわかった。

SP らは現状の参画が主として OSCE 対策に終始していることにある意味の不満を抱き、さらなる活動の場とスキルアップを求めていることがわかった。SP はロボットに務まるか？という形で問いかけを行い、彼らの考えと今後の課題を質的研究法を用いて明らかにした。AI に代表される時代の変化、ロボットでイメージされる均一で画一的な対応力とヒトの多様性、再認識される共感力の重要性、これらを踏まえた医学教育に求められるヒトの多様性への対応などが認識され、SP もこれらを十分に認識したうえで次世代の SP に進化並びに深化することへの意欲と使命感があることが確認された。

次世代 SP の育成プログラムとして、まず医学教育に関する現状理解、SP らが最も困難なスキルと考えるフィードバック技能、臨床医学に加え、社会学、文化人類学、行動科学といった医学教育の周辺領域の理解が基本的プログラムとして作成された。その上での実践として、本来 SP には求められていない教育技能、SP にも求められる自己研鑽と能動的学修能力、さらには研究能力などが次世代 SP として求められ、かつ実践可能であることが明らかとなった。

本研究の結果、次世代 SP という名称も視点もまだあくまでも我が国の医学教育の発展の上では端緒に過ぎず、仮に名付けるならば定義化は必要であろうが「Lay Person」としての医学教育参画が必要であると結論付けられる。語呂合わせになるが、SP から次世代 SP を経て LP への進化が必要であり、また可能であることが伺われ、次なる研究への課題として認識された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Fujikura T, Kashimura M, Hayasaka Y, Inoue C, Takeshita T	4. 巻 7
2. 論文標題 How do the first year students find the way of learning medicine in Japan?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 MedEdPublish	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15694/mep.2018.0000125.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hayasaka Y, Fujikura T, Kashimura M	4. 巻 85
2. 論文標題 Expectations for next-generation of simulated patients born from thoughtful anticipation of artificial intelligence-equipped robot simulated patients	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Nippon Medical School	6. 最初と最後の頁 347-349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1272/jnms.JNMS.2018_85-57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上原任, 井上千鹿子, 早坂明哲, 藤倉輝道, 山崎晴美	4. 巻 6
2. 論文標題 模擬患者に顎顔面領域の発赤・腫脹を再現するための教材の開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本シミュレーション医療教育学会雑誌	6. 最初と最後の頁 104 110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤倉輝道	4. 巻 10
2. 論文標題 プロフェッションと社会との契約：医学教育と法曹教育の接点	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 法曹養成と臨床教育	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻村正美・野村俊明・川西智也・原 祐子・北村 伸	4. 巻 29
2. 論文標題 地域在住高齢者にみられる迷惑行為に関する検討-地域包括支援センターを対象としたフォーカスグループ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 老年精神医学雑誌	6. 最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 伊東泰夫、太田峯男、松澤美和、結城英実、金原和也、藤倉輝道 他3名
2. 発表標題 医療面接実習やOSCEに参加した模擬患者が感じる現実との違和感
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤倉輝道、早坂明哲、櫻村正美、井上千鹿子
2. 発表標題 Robot SPに対する将来予測から生まれる次世代模擬患者に期待される深化
3. 学会等名 第50回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 早坂明哲、井上千鹿子、藤倉輝道
2. 発表標題 医学教育におけるRobot SPと生身のSPの共存に関する質問紙調査
3. 学会等名 第6回日本シミュレーション医療教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤倉輝道、早坂明哲、井上千鹿子
2. 発表標題 日本における一般市民の医学教育参画に関する現状
3. 学会等名 日本医学教育学会大会（第49回）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤倉輝道
2. 発表標題 プロフェッションと社会との契約：医学教育と法曹教育の接点
3. 学会等名 臨床法学教育学会創立10周年記念大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤倉輝道
2. 発表標題 仲間と、そして市民としてのSP参加で学ぶ：新入生オリエンテーションTBL 第2報
3. 学会等名 第48回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤倉輝道
2. 発表標題 仲間と、そして市民としてのSP参加で学ぶ新入生オリエンテーションTBL
3. 学会等名 第47回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井上 千鹿子 (Inoue Chikako) (90453042)	日本医科大学・医学部・非常勤講師 (32666)	
研究分担者	早坂 明哲 (Hayasaka Yoshiaki) (50516094)	日本医科大学・医学部・助教 (32666)	
研究分担者	榎村 正美 (Kashimura Masami) (00550550)	日本医科大学・医学部・講師 (32666)	